

令和7年度 練馬区立光が丘むらさき幼稚園 学校評価報告書

練馬区立光が丘むらさき幼稚園
園長 篠原直子

1 自己評価結果

(1) 概要

今年度は、4名の担任のうち3名が替わったため、新しい組織として、互いの経験や考えを出し合い、さらによりよい新しい実践を生み出すことを目指した。「Mix&Harmony」を園運営のキーワードに掲げ、多様な育ちの子どもたちが互いに受け入れ、認め合う園生活を実現するために、教職員と家庭、地域が、混ざり合い、響き合って、共に育み共に育つ教育活動を推進した。

12月に実施した教育活動についてのアンケートでは、保護者からは7項目中5項目において、回答者全員が「概ね達成している」という高評価をいただいた。自由記述では、本園の教育が一人一人の幼児を温かく肯定的に受け止め、共に育ち合う関係を育てていること、それぞれの興味関心に応じた遊びを通して様々な学びを重ねていること、教職員と保護者が連携し、共に育む教育が行われていること、また教員が園内研究や園外の研修などを通じて日々資質向上のため努力していることを高く評価していただいた。

教職員の自己評価においては、今年度担任4名のうち3名が替わるという状況にあったにもかかわらず、7項目中4項目で、全員が「概ねできた」と評価している。そして、年間を通して同程度からやや高評価に推移しており、教員が日々努力し、よりよくなったと成果を実感していることが分かる。これは先に述べた研究を通じて互いに切磋琢磨し、共によりよい教育の実現に向けて力を合わせたことが大きな要因であると考えられる。

【成果】

- ・練馬区教育委員会教育課題研究推進園として、「多様性を尊重し一人一人が輝く幼稚園を目指して～共に育つ・共に育む教育課程の編成を考える～」をテーマに、11月20日に発表会を行った。区教育委員会教育長、歴代園長方来賓をはじめ、区内公立幼稚園、小中学校、そして就学前教育施設である私立幼稚園、公私立保育所から約80名の参加があり、練馬区の幼保小連携推進における「タテとヨコのつながりの結節点」としての役割を果たすことができた。また、区内のみならず福島県や千葉県の教育委員をはじめ他地域の幼児教育関係者の参加もあり、多くの感想をいただいた。その他、区立幼稚園教育会や教育指導課主催の幼児教育研修会、東京都教育庁主催の「就学前カンファレンス」など外部研修会においても、本園の取組を伝え、学びを共有する機会を重ねた。これらの取組により、教職員が共に学び合う関係が構築され、教員の資質向上につながっている。
- ・教育活動の充実については、教員の半分以上が替わったこともあり、まず互いの意見を出し合い、情報を共有し、連携を深めることを目指した。特に5歳児は、昨年度に引き続き幼児の実態に応じた保育室の使い方を園全体で協議し、環境の再構成を適宜図ってきた。
- ・保護者や地域への発信については、管理職を中心とした「ヤアヤアグングン通信」の発行が3年目となり、日々の幼児の姿や幼児が経験している学びについて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の各項目を引用した掲示物が定着してきた。今年度は、遊びのつながりと学びの深まりについては、月1回発行される学級通信で各担任より具体的に伝え、各学期末には園長による子育てトークにて、園の教育方針や幼児の育ちを丁寧に伝えるようにしたことで、保護者から好評を得ている。
- ・地域の子育て支援に関しては、今年度も毎月2回の未就園児の会に加え、未就園児親子向けに週2回保育室開放を行った。近年の少子化にともない、今年度は参加者が少なく、かつ低年齢化が進んでいる。また、昨年度に引き続き、区保育課の保育園待機児対策として空き保育室を利用した1年保育1歳児保育が実施された。1名スタートであったが少しずつ増え7名の在籍となった。日々の教育活動や行事などでは交流を図り、職員間の連携も図っている。

【課題】

- ・在籍児の減少を踏まえ、他者との多様なかかわりを経験し豊かな体験を積み重ねられるように、引き続き、学年の枠にとらわれず、園全体で教育活動を推進していくなど、教育活動を工夫したい。
- ・保護者からの意見では少数ではあるが、「保育参観など園生活の様子をもっと見たい」という意見があった。園生活に慣れ、担任との信頼関係が構築されるまでの期間に個人差が大きく、幼児によっては保護者が複数参観する機会が負担になる場合もあるため、幼児の実態を見極めながら、保育参観の時期や回数、方法については、園全体で検討したい。
- ・施設や園庭環境の安全管理および怪我などの情報については、引き続き園内で密に連携をとり、共有し、必要に応じて関係諸機関と連携を図りながら、家庭にも丁寧に伝えていく。
- ・地域との連携においては、まだまだ充実しているとは言い難く、さらなる工夫が必要である。今後ますます多様な人とのかかわりが必要となるため、近隣小中学校やこども発達支援センターなどの施設や関係諸機関をはじめ、元保護者や修了生ボランティアなどの地域の人材活用についても積極的に行いたい。

【改善策】

- ・安全面の配慮については、学期ごとに危機管理マニュアルの読み合わせ、アレルギー対応研修、ヒヤリハット事例の共有を行うなど、会計年度任用職員を含めた園全体で情報共有を図る。
- ・在籍園児数が年々減少傾向にあり、次年度の新入園児申し込みはさらに減少している。区内の就学前施設の充員状況も3～5歳児は空きがでてきているとのことで、区全体で少子化の傾向にある中、保護者からの要望にある「3年保育」と「長期休業中の預かり保育」の実現は喫緊の課題である。引き続き関係課に要望していきたい。

(2) 根拠となる資料

教育活動アンケート集計結果報告(表 1)

教員自己評価総括表(表 2)

教育活動アンケート集計結果報告

表 1

●保護者のアンケート結果より 保護者回答数 46/在籍数52 回答率88%

A:あてはまる B:まああてはまる C:あまりあてはまらない D:あてはまらない (小数点1桁以下四捨五入)

質問事項	保護者				教職員(含:会計年度任用職員)			
	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)
1 お子さんは、先生や友達に親しみを感じ、遊びや生活に主体的に取り組み、園生活を楽しんでいると思いますか	38 (83)	8 (17)	—	—	23 (88)	3 (18)	—	—
2 幼稚園は、一人一人の幼児の興味や関心に応じて、園内の環境を工夫したり、様々な体験を重ねられるような取組をしていましたか	38 (83)	8 (17)	—	—	24 (92)	2 (8)	—	—
3 園生活では、様々な人とかかわり、親しみを感じる機会が充実していましたか	32 (70)	14 (30)	—	—	18 (69)	8 (33)	—	—
4 園だより、ヤアヤアグングン通信などの配信や掲示物、子育てトークや保護者会などを通じて、教育方針や教育活動・内容が伝わりましたか	39 (85)	7 (15)	—	—	25 (96)	1 (4)	—	—
5 保育参加や保育参観、各行事、降園時の会話や学年だよりなどを通じて、園生活の様子や子どもたちの成長を感じることができましたか	35 (76)	10 (22)	1 (2)	—	25 (96)	1 (4)	—	—
6 避難訓練や安全指導の実施、施設や遊具などの安全管理を行い、怪我などの対応や報告は適切でしたか	38 (83)	6 (13)	2 (4)	—	21 (81)	5 (19)	—	—
7 教職員は、笑顔で明るく接し、家庭と連携して子どもたちを育もうとしていますか	42 (91)	4 (9)	—	—	24 (92)	2 (8)	—	—

自由意見(保護者のみ)

- ・子どもたちが伸び伸びと自分のやりたいことを実現できる。先生がとことんサポートしてくれる。同意見複数
- ・一人一人の子どもの個性をしっかり理解し、温かく受け止めてくれる。同意見複数
- ・その子に必要な支援やサポートをして、発達を促してくれる。同意見複数
- ・行事など毎年同じではなくて、その年の子どもたちの様子に合わせて工夫している。
- ・自分のやりたい遊びをしながら、ものを作ったり、音楽に合わせて踊ったり、体を動かしたり、いろんな経験を広げている。
- ・喧嘩をしたり、怪我をしたりしたことを隠さずに知らせてくれるので安心して通わせられる。
- ・先生たちが温かく、どの先生も見ている。先生たちの協体制度がよいので安心できる。同意見複数
- ・子育てで悩んだときに相談にのってくれる。困ったときに頼れる。同意見複数
- ・ヤアヤアグングン通信など子どもの育ちが分かって親としての気づきにもつながる。
- ・幼稚園内は自然豊かで季節によって、たくさんの植物の成長がみられる。同意見複数
- ・様々な遊び、活動範囲の広さなど、体も心ものびのび過ごせる環境がいい。そこからうまれる発想、工夫がこれからいろいろな場面で役立つと思う。

【要望・ご意見】

- ・3年保育になるとよい。預かりが長期休業中もあるとよい。同様意見複数
 - ▶区園長会で3年保育、長期休業中の預かり保育などについては区教育委員会に要望しているところです。また令和7年度より、練馬区教育委員会に区立幼稚園検討委員会が立ち上げられ、区立幼稚園のあり方について検討されています。保護者の方からのご意見を伝え、引き続き要望していきたいと思えます。
- ・父母の会の活動は今後負担にならないとよい(1件)
 - ▶父母の会の活動内容については、さまざまな意見を伺いながら、検討工夫してまいります。
- ・保育参観など普段の様子を見る機会を増やしてほしい(1件)
 - ▶保護者の方と一緒に取り組む機会など、園生活の様子を見ていただく工夫をさらに考えたいと思えます。
- ・園庭に画鋸やネジが落ちていることがあった。(1件)
 - ▶申し訳ありませんでした。引き続き、安全点検を含め、園全体で注意してまいります。安全面で気付かれたことがありましたら、引き続き、その都度園にお知らせください。

教員自己評価総括表

表2

・年間を通して、自己評価得点は、同程度からやや高得点になっており、教員が日々の実践について、研修や研鑽を積み、よりよくなっていると捉えていることが分かる。

【評価16～4点】 A(十分にできた)4点 B(比較的できた)3点 C(あまりできなかった)2点 D(できなかった)1点

項目	内容	評価			
		A	B	C	D
教育活動	1. 一人一人の幼児の特性、友達関係や集団の育ちなどを肯定的に捉えるために、日々の記録や教職員間での情報交換などによる振り返りを行いましたか	1→3	3→0	0→1	—
	13→14				
	2. 様々な直接体験を重ね、豊かな遊びを生み出す環境・教材の工夫を行いましたか	1→1	3→3	—	—
	13→13				
	3. 一人一人の幼児は、自分を受け入れられている安心感を基盤に、互いの存在を受け入れ合う温かな関係を育むよう援助を行いましたか	2→2	2→2	—	—
	14→14				
○肯定的なまなざしで日々保育にあたった。記録は後半、園内研につながることも意識しながら工夫して取り組んだ。 ○幼児の姿や楽しんでいることをもとに、日々の記録を作成した。また、担任間で情報交換をしながら幼児の実態を理解してきた。 ○担任たちが悩んだり、迷ったりするときに管理職の先生が助言、フォローし、支えてくれる関係がつけられているからこそ、担任も安心して保育ができています。そして、自分の保育を振り返ることができている。					

○幼児の実態を捉えながら、興味を活かす+思いと遊びをつなげる+遊びの刺激(エッセンス)を取り入れることを意識し実践した。

●自分の学級だけでなく、それぞれが園全体として見る目をもてるとさらに良い。自分が年長だったら？年少だったら？と考えられるとより深まっていく。

●記録に関しては2学期後半に滞ることが多かった。

○年長担任間は後半になりようやく自然な形で連携しながら保育ができるようになったと思う。

○情報交換を行うことで日々の保育の援助に活かすことができている。また、様々な職員の話を書くことで、育ちの見方、考え方、とらえ方など勉強になっている。

○幼児の直接体験が好きな遊びにつながるよう意識した。

●豊かな遊びが生まれるよう実態に合った教材研究を深めたい。

●日々の業務に追われ、教材研究が後回しになってしまい、取り入れてみたいなど思ったことでも結局できずに終わってしまっている。

○季節の移り変わりを肌で感じられるような戸外での遊び(虫取り、虫や植物の観察、興味を広げたり深めたりする収穫物を絵にしてイメージを広げお話し作りなど)の展開をすることができた。

○一人一人との関係づくり、保護者との対話を基盤に試行錯誤してきた。それぞれが安定して過ごし、互いの持ち味を受け入れる土台ができている。

○一人一人が安心できるよう、丁寧に信頼関係を築けるよう関わってきた。

●それぞれの幼児の実態に応じて、安心して過ごせる環境や居場所づくりができるようさらに努力したい。

○一人一人のありのままの姿を受け入れることを意識して援助を重ねていくことで、幼児同士も互いに受け入れ合う温かな関係性ができてきていると感じている。

○完全ではないが、多様な個性をもつ幼児たちが、毎日一緒にいて安心する場にはなってきた。一人一人が自分で楽しいと思える環境作りができってきた。

【教育活動に関して】

- ・一人一人の幼児を肯定的に捉え、日々の教育活動を振り返ることを丁寧にっており、それを評価する記述が多く見られる。また職員間で対話し、さらに多角的な視点で実践を振り返ろうとしており、学び合う関係が醸成されている。
- ・半面、日々の業務に追われ教材研究や記録の作成が滞ることがあるとの記述もあるので、業務の精選や優先順位を共有する必要がある。
- ・一人一人の幼児が受け入れられ、それが互いを認め合う温かな関係につながるように、園全体で努力してきた。多様性を尊重しつつ、互いが受け入れ合えるように、さらに教職員同士、家庭や地域とも連携を深めたい。

項目	内容	A	B	C	D
園運営	1. 自身の課題に向かって学ぶ姿勢をもち、それを互いに共有し学び合おうとしましたか	—	3→4	1→0	—
	11→12				
	2. 自身の園務分掌に責任をもって取り組み、教育活動の充実や業務改善につながる提案や実施を工夫しましたか	0→2	4→2	—	—
12→14					
園運営	3. 安全・安心な幼稚園作りのため、日々の安全面の配慮およびヒヤリハットの情報共有や改善に向けての連携を行いましたか	2→2	2→2	—	—
	14→14				
園運営	<p>○課題に向かって学んでいたが、それを共有して還元するまでには至らなかったところがある。</p> <p>●共有するためには、時間の確保が必要。時間がないのではなく、時間は自分でつくる。</p> <p>○区幼教などを通して幼児理解や環境・教材の工夫など学ぶことができた。</p> <p>●研修や他の教員から学んだことを保育に活かしていけるようさらに意識して取り組む。</p> <p>○自分の園務分掌に限らず、提案や改善につながるように発信し努めることができた。</p> <p>○自身の分掌の内容を理解し、適宜他の教員にも相談しながら園務分掌を進めてきた。</p> <p>○園務分掌では責任をもち計画通りに進めることができている。業務改善などでは、職員で意見を出し合いより良いものにしようとする動きがあると思われる。</p> <p>○ヒヤリハットしたところは職員間で日々情報共有し、改善を考えていくことができた。介助員とも細やかに連携してきた。</p> <p>○毎月の安全点検や日々気が付いたことなど教員間で情報共有をしながら環境を見直し改善することができた。</p> <p>○定期的な安全点検以外にも、日々の保育の中で、幼児にとって安全かどうかは常に意識している。</p> <p>●ただ、行事への取り組みが忙しく担任だけでは目が行き届かない場合は、園内の教職員と連携を図り、いつも以上に全体で安全面に配慮していかなければいけないと感じている。</p> <p>○担任や介助員の配置など、室内外で目が届くような動き方をし、注意をしてきた。</p>				

【園運営について】

- ・研修に関しては、それぞれの教員が自身の成果として挙げた記述は少ないが、講師を招聘しての園内研をはじめ特別支援研修会や区内の各研修(担当分掌)、区幼教などで意欲的に学びを深める姿が多く見られている。
- ・園務分掌に関しては、若手教員や臨時任用教員にも具体的に説明や確認をする、疑問に思ったことを質問するなど、お互いが協力し合って取り組もうとする姿勢が見られている。
- ・園内で気付いたこと、特に「ヒヤリハット」のできごととは、すぐに声に出して情報共有できるように心がけた。重大な怪我、事故はなかったことが成果である。

項目	内容	A	B	C	D
子育て支援体制・地域との連携	1. 保護者・地域との連携・協働に向け、本園の教育内容や日々の幼児の育ちについて、具体的な発信を心掛けましたか	1→1	2→3	1→0	—
		12→13			
	①対話と②書面で 発信してきた。 ①日々保護者と対話するささやかな時間の積み重ねを大事にしてきた。 ②行事などはタイムリーにヤアグン通信で管理職の先生がしてくださっているので、遊びの意味や経験していることは学年通信で伝えることを意識して発信してきた。 ●むらさき幼稚園に限らず、区立は特に自由な幼稚園と言うイメージが強い。自由だからなんでもいい、と言うわけではなく、その中で確かに大事にしていること、自由の中で育まれている思考力・探究心・遊びの力などを発信できると良い。 ●保護者への連絡では幼児の姿や育ちがより具体的に伝わるよう努めていく。 ●個別に話すことは意識できたが、全体への発信(通信含め)は今学期も少なかった。 日々行っている保育の内容が伝わるような発信をしていかなければいけないと感じている。 ○ヤアグン通信やSigfyなどで発信できている。				

【子育て支援体制について】

- ・担当が日々のできごとを通して、教育内容や幼児の育ちを伝えることと、管理職による通信や子育てトークなどによる発信と、二つの柱で保護者との連携は図ることができた。
- ・地域との連携・協働については、少しずつ取組を工夫しているところである。次年度以降、学校支援コーディネーターの力も借りながら、さらに充実させたい。

2 学校関係者評価

(1) 総括

- 保護者アンケートの評価から、幼児・保護者ともに園が安心で安全な場所なのだと伺える。
- 一人一人を大切にしていること、教員が連携をとって、チームで教育を推進していることが伝わる。
- 一人一人の個性や多様性を尊重しつつ、互いが認め合い、協同的に取り組んでいるプロセスが見られている。

【成果】

- ・学年や学級便りの中で、子どもたちが遊びの中で学んでいることが分かりやすく示されており、子どもたちが互いの考えを聞いたり思いを受け止めたりしながら協同的に育ち合っているのが分かる。
- ・子どもたちの「やりたい」という思いを尊重し、それが実現できるように教師が丁寧にサポートしていることが分かる。
- ・研究発表会では、多くの参加者があり、区議会でもその成果について話題になるなど、様々なところで高い評価を受けている。先生たちにとって大きな学びと成長になったのではないかと。教員の質が向上することで、子どもたちが高い質の教育を受けることができる。
- ・幼児が教員を信頼していることが分かる。それが保護者にとっても安心感につながると思われる。
- ・子育てトークやヤアグン通信など、遊びや生活の中での学びや育ちが丁寧に伝える姿勢が見られる。

【課題】

- ・少子化や保護者の就労による園児数の減少は例年話題になっているが、なかなか改善されない。引き続き区に働きかけていく必要がある。
- ・教員が丁寧に一人一人に対応し、学級便りなどの作成や園内研究の推進を行っている。教育の質の向上は大きな成果であるが、多くの業務に疲弊しないような働き方改革の推進についてさらに工夫が必要である。

【改善策】

- ・少子化により、地域の未就園児もほとんどが他園に在籍している状況である。次年度入園予定の年齢だけでなく、広く地域の子育て支援を担えるように、引き続き地道なアピールを続けていく必要がある。
- ・保護者サークルが今年度地域の児童館等関係施設と連携し、本園のアピールも行った。引き続き、地域につながる機会を園だけでなく保護者や修生保護者の力を借りながら進めていけるとよい。

3 評価結果の公表等

- ・3月保護者会で資料を配付し、園長より説明する。
- ・3月中にホームページでの公表を行う。(概要)

4 次年度の学校改善へ向けた園長の見解

(1) 中期経営目標の実現に向けて

令和8年度までの中期経営目標

- ① 様々な直接体験を通し、生きる力の基礎・豊かな心を育む
- ② 組織づくりの強化と意欲的に保育に取り組む教員の育成
- ③ 地域の幼稚園として子育て支援の推進
- ④ 安全安心・清潔な幼稚園づくりの推進

- ① 「様々な直接体験を通し、生きる力の基礎・豊かな心を育む」については、引き続き、日々の記録や振り返りの話し合いを通して、幼児が遊びの中で経験していることを丁寧に読み取り、実態に即した教材研究と環境の構成を行う。特に「東京都すくわくプログラム」事業を活用し、園庭環境の充実と空き教室の利用の工夫を図り、身近な環境に自ら関わり、気付いたり考えたり、試したり工夫したりして心揺さぶられる体験を重ねられるようにする。必要に応じて ICT も活用し、幼児の興味・関心を深める環境を工夫していく。また、園児数が少なくなっているため、学級や学年の枠にこだわらず、教員間で柔軟に連携を取り、園全体で子どもたちを育てていくという体制を作っていく。これらの内容を、本年度の園内研究で作成した長期指導計画に反映し、さらに教育課程の編成に活かしていく。

特別な支援を必要とする幼児、海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児に対しては、適切な支援が行えるように、園内での協議を重ねながら、こども発達支援センター、学校教育支援センター、子ども家庭支援センター等、関係機関との連携を密にする。様々な人との関わりを通して、互いを思いやったり、尊重したりする心情を育む。

- ② 「組織づくりの強化と意欲的に保育に取り組む教員の育成」については、各自が目標を具体的にもち、資質・能力の向上を目指す。そのために、それぞれの課題、職層や経験年数などに応じた研究会、研修会に参加できるように機会をつくっていく。また、各担任が、学級や学年の実態に応じた教育活動の充実を図るため、朝会、保育後の振り返り、学年会、園内研究および特別支援研修会などを通して、幼児の実態や援助の方向性について共有できるようにする。特に会計年度任用職員と日々の打ち合わせ、定期的、計画的な研修の時間をつくり、園全体で方向性を共有して、一人一人の幼児への適切な援助、きめ細やかな支援を行っていく。

一人一人の教員が自身の役割を自覚し、会議の内容を精選することで、教材研究や各年間の打合せの時間を確保する。勤務時間外の仕事を月 45 時間以内にすることを目指す。

- ③ 「地域の幼稚園として子育て支援の推進」では、今年度、管理職が日々のできごとを掲示するヤァヤァグングン通信と、各月ごとに担任が遊びの中での学びを丁寧に伝える学級や学年便り、園長が写真のスライドショーを通じて、学期ごとの幼児の育ちや変容、園の教育方針を伝える子育てトークなど、それぞれの内容や質を分けて発信していくことで、在園の保護者には園の教育方針が伝わったという評価をいただいた。今後は、それらを地域や未就園児に伝えていくために HP などによる発信を工夫したい。また令和8年度は、40周年記念の年となるので、本園の「これまで」と「これから」をつなぐ年として、父母の会、学校評議員、修了児保護者ボランティア、学校支援コーディネーターとの連携を密に、地域に愛される園として位置づくような取組を工夫したい。

ミッキークラブ(未就園児保育)や空き保育室開放など地域の未就園児親子が集える居場所づくりや子育て相談など入園前の親子への支援と同時に、修了後の保護者や児童にとっても安心できる拠り所としての役割を果たしていく。

- ④ 「安全安心・清潔な幼稚園づくりの推進」については、一人一人の教職員が幼児の安全な生活を守るという意識をもち、全教職員の協力のもと、推進する。「危機管理マニュアル」「地震対策の手引き」「不審者対応の手引き」「学校の新しい生活様式」等を共有し、園内の安全・安心に対する職員の意識を一層高め、定期的な訓練や研修を通して、改善を考え、実践していく。定期的な避難訓練・安全指導とともに、幼児には、自分の身は自分で守ろうとする気持ちがもてるように必要性や意味を知らせ、繰り返し指導を積み重ねていく。また、保護者や地域と共に非常時の対応や危機管理情報などの共有を図っていく。

持続可能な社会の一員として、資源の再利用やゴミの分別などに意識をもち、自然環境の整備を行いながら、清潔で心地よい園の空間を幼児と共に作っていく。